Innocent RABBIT

南　晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Innocent RABBIT

【Nコード】
N7656N

【作者名】
南晶

【あらすじ】
生物兵器として造られたクローン人間、生体コードRABBIT。
医学生のサヤカは担当主治医として、彼の生体研究をすることを任命される。
実験体として生きてきた彼はあまりに無垢で、サヤカはやがて彼に惹かれていく。それが殺人兵器としての彼を覚醒させることになるとは、二人は気付いていなかった・・・。
近未来ファンタジー。

実験体

真っ白な無菌室。
点滴液をぶら下げた大きな白いベッドが部屋の中央にあるだけの何も無い部屋。
白いベッドには血圧計やら、脳波計やら、あらゆる機能が内蔵された最新の機械が設置されている。
そのベッドには、体中にチューブが配線されて寝かされている青年がいた。

私は恐る恐るベッドに近づき、そうっと彼の寝顔を見た。
色素がないみたいに真っ白なきれいな人だ。
整った顔に銀色の髪がかかっている。
あたしは心の中で呟いた。

「初めまして、ＲＡＢＢＩＴ。」

それは間違いなく、運命の出会いだった。

◇◇◇◇

「ミス　サヤカ。彼がこれから君が担当する実験体だ。生体コードはＲＡＢＢＩＴ。長い付き合いになるかもしれないからよく見ておきなさい。」

突然呼ばれて、私は飛び上がった。
いつの間にか無菌室に入ってきたブライアン教授だ。

宇宙服のような真っ白な白衣を全身に纏い、眼鏡を掛けた青い眼だけが顔に空いた穴から覗いている。

あたしは日本式に頭を深く下げた。

「はい、まだインターンのわたしが選ばれて、担当できることを誇りに思います。推薦して頂いたブライアン教授に恥をかかせることのないよう頑張ります。」

ブライアン教授は眼鏡の奥の瞳を細めて笑った。

「そんなに気負う必要は無い。何も君に彼を解体してもらう訳じゃない。実験体の毎日のヘルスチェックとレポートの提出さえしてもらえればいいんだ。飼育係になったつもりで気楽にやってくれ。」

「いえ、それでも選んで頂いた以上全力で取り組みます。」

私は生真面目に返答した。

「その真面目さは君のいいところだ。さすが日本人の末裔だね。期待してるよ。」

ブライアン教授は肩をすくめて無菌室を出て行った。

無菌室に実験体と一人残された私は、彼の観察の続きを始めた。

見かけは普通の人と変らない。

頭に巨大なヘルメットのような脳波計をつけられ、両手は十字に広

げられ、手枷で固定されている。
胸までシーツが掛けられている裸体には所狭しとチューブが貼り付けられ機械部品の配線のようだ。
点滴液はおそらく麻酔だろう。

これから彼は私の研究課題になり、彼にとって私は担当主治医になる。
同じ人に見えて彼は人間ではない。
彼を実験体として、自分は研究者として冷静に観察しなければならない。
私はマニュアル通りにそう思い込んでいた。

その時、突然彼の目が開いた。
赤い、うさぎのような瞳だった。
私はぎょっとして後ずさる。
彼は動いた私に気付き、赤い目でぼんやり私を見た。
びっくりするほどきれいな顔だ。
生体コードがＲＡＢＢＩＴの意味が分かった。
銀髪が掛かった真っ白な顔に赤い瞳は雪山の白兎を連想させた。
彼はしばらく私をぼんやり見ていたが、まだ麻酔が効いているのか、また目を閉じると眠ってしまった。

子供のような安らかな寝顔。
彼が生物兵器として造られたクローン人間だとは、その時の私には

思えなかった。

実験体　2

初めて実験体ＲＡＢＢＩＴと顔を合わせたその翌日から、私に課せられた彼の研究が始まった。
私は更衣室で白衣に着替えながら今までの一連の成り行きを思い返していた。

◇◇◇◇

医学部の私にブライアン教授から直々に依頼が来たのはたった一週間前のことだ。

医学部の講義は続けること。
それ以外の講義は全て免除。実験体の研究に専念すること。
その記録は単位として認められること。
結果次第で、類似ケースの研究チームのメンバーに抜擢されること。
メンバーに入れば医学部の授業料は全て免除されること。

ブライアン教授は私が今回の担当研究員に抜擢されたことを告げ、とりあえずおいしい所だけ端的に説明した。
嬉しい反面、何の実績もないタダの医学生の私が、何故、抜擢されたのかよく分からなかった。
「君の前向きな姿勢が選考員に気に入られたんだよ。頑張ってくれたまえ。」

白いあごひげに覆われた顔に眼鏡を乗せたブライアン教授は、ヨーロッパ系民族らしくウィンクして見せた。
「だが、くれぐれも気をつけてくれ。」
脳裏に教授の言葉が蘇る。
私は長い黒髪をまとめて白い帽子を被った。
「ＲＡＢＢＩＴは人間ではない。生物兵器だ。本気になれば、君だけでなくこの施設全体を破壊する能力を持っている。」
ピッチリ張り付くゴム手袋を両手にはめた。
何故、そんなに危険な実験体をあたしのような学生に担当させることになったのか？
懸念する部分は大いにあった。
だが授業料免除と、研究員としての進路が約束されることは魅力的だったし、何よりクローン生物は私の研究テーマだった。
クローン技術は２３世紀の今、もはや開発しつくされている。
自分のクローンを移植用に保存してあるクローンバンクなるものも存在する。
だが、今でも倫理的にクローン人間は大いに語られる話題ではない。
ましてや生物兵器として開発されたクローン人間など国家機密だ。
まだ卒業もしてない私が、本物のクローン人間に接触を持てるなんて科学者としては夢のような話だった。
どんな理由で抜擢されたとしても、結局この話は受けただろう。

真っ白な白衣になった私は、無菌室の扉の前に立った。
ＩＤカードをスキャンし、パスワードを打ち込む。
白い扉が左右に開いた。
昨日と同じ、大きなベッドがあるだけの部屋。
だが昨日と違うのは、寝かされている実験体の彼が赤い目をぱっちり開けてこちらを見ている。
昨日と同じように鉄製の手枷で固定されているが、どうやら麻酔はされていない。
目が合って、私はぎょっとした。

・・・突然襲われたらどうする？

生物兵器とは聞いているが、具体的にどんな能力があるのか情報は一切与えられていなかった。

本気になればこんな手枷、壊してしまうかも・・・。

逃げ腰になって、無意識に後ずさる。
だが、科学者としてのプライドが、何とか私を踏み留まらせた。
勇気を振り絞り、真っ直ぐ彼のベッドに向かう。
彼は赤い目であたしを凝視している。
私の鼓動が早まった。

こ、殺されませんように・・・！！！

先に声を掛けたのは意外にも彼だった。

「あなたは新しい先生？」

良く通る、男性にしては高い声だ。

「え？そ、そう。あ、あたしはサヤカ　オキノ。２３歳日系人よ。これからあなたの担当することになりました。よろしくお願いします。」

完全に私は動揺して、一方的に自己紹介するといつもの癖で頭を下げた。

不思議なものでも見るような目つきをして、彼は私をベッドから見上げた。

「サヤカが名前？日系人て？」

「に、日系人ていうのはご先祖が日本という国で生まれた人達のこと・・・かな？今はもう無い国だけどね。」

想定外の質問に私はかなり適当な返事をする。

だが、全くの嘘でもない。

２３世紀の今、私のご先祖様の国、日本はもう存在していない。

「ミス　サヤカは物知りだね。ぼくはここから出たことがないからよく分からないけど。」

彼は感心した顔をする。

素直な人だ。

その間も彼の赤い目は私を凝視したままだ。

何と言うか視線に遠慮がない。

好奇心を抑えられない子供がじーっと見つめるアレに似ている。

「でも、ぼくは人間ではないし、そんなに緊張しなくていいよ。」

目を逸らさずに彼は言った。

人間ではない・・・。

確かにそう思うように言われてきた。
私情が入ると科学者として冷静な判断ができなくなるからだ。
モルモットや犬の実験動物には何度も接してきた私だが、実験人間に逢ったのは初めてだ。
この場合、どんな態度で接するのが正しいのか。
目の前にいる彼は兵器だろうと、実験体であろうと、少なくとも見かけは限りなく人間だった。

彼は赤い目で沈黙している私を見つめている。
私の出方を伺っているのか。
私は腹をくくった。

「あなたは動物には見えないわ。だから人間と見なします。これからよろしく。」

彼はきょとんとした顔をする。
どうやら深い意味はなかったらしい。
だが、私が友好的に歩み寄ったことは理解したようだ。
にっこり笑って私に応えた。

「よろしく、ミス　サヤカ。ぼくは名前はないけど、今までの先生にはラビって呼ばれてた。これでも２０歳です。」

この施設を破壊できる能力を持つ生物兵器。
彼の素顔はあまりに無垢な子供だった。

実験体　3

ぎくしゃくした互いの自己紹介を終え、私はまずノルマのヘルスチェックアップの記録を取る。
とは言っても、私が実際手を触れてすることは殆どない。
彼の体に配線されたチューブが正確に彼の体内情報をコンピューターに送り、データはその場でプリントアウトされる。
私はそのデータを読み、彼の体調不良、変化を記録する。
変化があれば、本部に連絡、体調がよければそれだけだ。
万全の環境対策をしている筈なので、彼の体調が変化することは恐らく皆無に等しいだろう。

「身長１７５ｃｍ、体重６０Ｋｇ、血圧１２０－６０　体温３６．３。血糖値は昨日のデータより少し高いね。ラビ、いつ食事してるの？」

私は主治医の顔になってデータを読む。
ベッドに磔にされたままラビは私の言う事をじっと聞いていた。

「・・・食事は7時と１２時と１８時。昨日データ取った先生より、サヤカが早く来たからじゃないかな？」

なるほど。

私は顔を上げた。
彼はヘルスチェックの時だけ、研究員に危害を加えないようにこうやって自由を奪われているが、当然ながらいつもこの状態では無い。
実験体の彼にも日常がある。

「いつもは何してるの？」

私は彼の私生活に興味を持った。
まだ、医学生の私は研究所の実態を見たことがなかったのだ。

「いつも？部屋にいて、絵本を読んでる。」

・・・・・絵本？

２０歳の成人男性が絵本を読んでるとはどういうことだろう？
メンタル訓練でもしているのか？

「ラビ、私もあなたの部屋に遊びに行ってもいい？」

興味を持った私は子供に語るように聞いてみた。
ラビはきょとんとした顔をしていたが、やがて嬉しそうに赤い目を輝かせた。

「いつでも来てよ。ぼくの絵本読んでくれると助かる。ぼくは字が読めないから。」

私はそれを聞いて殴られたようなショックを受けた。
人権が認められていない実験体に教育がされる筈ない。
彼はこの歳になっても字も読めないので、絵本を見て楽しむしかないのだ。
無垢な表情、子供っぽい仕草や話し方の理由がやっと分かった。
彼の精神は２０才ではない。
私の目が熱く潤んでくるのが分かって、慌ててデータに目を落とす。

私情は禁物だ。
「じゃ、じゃあ、血液取らせてもらって今日はおしまい。ちょっと痛いわよ。」
私は涙を悟られないように、注射器を出しておどけて見せた。
「いいよ。慣れてるから。」
ラビは笑いながらされるがままになっていた。
彼の白い腕から真っ赤な液体が注射器の中に入っていく。
私と同じ色の血が流れている同じ人間。
私は何故か、せつなさで胸が締め付けられた。
彼の屈託の無い瞳はその時もまっすぐに私を見ていた。

目的　1

それから私は、大学の講義が終わるとラビの元に通った。
私に課せられたノルマはヘルスチェックだけだったが、面会に時間制限があるわけでもなかった。
私のクローン人間の研究に彼を使っても良いことになっていたので、この機会に貴重な生物兵器を観察させてもらおうと思っていた。
相変わらず、面会の時には彼はベッドに磔にされ、私に危害を加えないよう自由を奪われていた。
彼がベッドに固定されないと、部屋のドアロックは解除されない。
私が来る時間になると彼は自主的にベッドに横たわり、手枷を掛けられる。
そうしないと私が入ることができないのだ。
時々私が早く到着するとドアが開かないことがある。
そんな時はインターホンで声を掛けて、彼が準備するのを待つ。
最初は私が来るのが迷惑じゃなかろうかと思ったが、ラビは心底嬉しそうに歓迎してくれる。
まるで、友達がいない子供が遊び相手を待っているみたいに。

「サヤカ先生。今日は何するの？」
ベッドに横たわってラビは私を見上げる。
何して遊ぶの？といわんばかりだ。
「いつものチェックよ。あと、私の研究も付き合ってほしいな。」
彼はきょとんとする。
「何をするの？」

私はベッドの傍らの椅子に腰掛け、彼に微笑んだ。

「少しお話しよっか、ラビ。」

「いいよ。何の話？」

「あなたのこと聞きたいの。あなたはいつからここにいるの？」

ラビは少し考えてから困った顔をした。

「よく分からない。だけど気付いたらここにいた。」

「・・・・じゃ、ここから出たことはある？」

「ない。ぼくはこの建物の外には出たことない。」

「・・・出たい？」

「・・・・。」

ラビは私を凝視した。
この質問は危険だったか？
やがてラビは口を開いた。

「出なくてもいい。だってサヤカ先生が来てくれるから。」

私の心臓がどきっと鳴った。

「他の先生が言ってた。ぼくは出ちゃいけないって。退屈だったけ

ど今は毎日サヤカが来てくれるからいいや。」

私は何だか心苦しくなった。
私にとっては学費免除に釣られて始めた任務だったのに、彼は私が来るのを心待ちにしているのだ。

「サヤカ先生、ぼくの部屋にはいつ来てくれる？」

ラビは子供のように目を輝かせて聞いてくる。
絵本を読んで欲しいのだろう。

「本部の許可を取ってみるわ。お部屋きれいにして待っててね。」

私は横たわっている彼を見下ろし、子供をなだめるように優しく言った。

しばらく会話を続けると分かるのだが、彼の精神年齢は恐らく7~9歳くらいだ。
実年齢が２０歳としても、２０年間ずっとここにいた訳ではなさそうだった。
今までどこで何をしてきたのだろう。
そもそも生体コードＲＡＢＢＩＴについて与えられた情報が少なすぎた。
私はぐるりと部屋を見回す。
真っ白な何も無い部屋だが、四方にカメラが設置されている。
今この時も本部に監視されているのだろう。

私がここに送り込まれたことには何の目的があるのだ？

「ねえ、サヤカ先生。ねえってば！」

突然声を掛けられ、私ははっと我に帰った。
磔にされたままラビが、私を呼ぼうと足だけバタバタさせている。
体に掛けられたシーツが跳ね除けられ、チューブが配線された裸体が顕わになる。
真っ白い、きれいな体だった。
だが彫刻のようにしなやかな肢体には当然、生殖器もあるわけで・・・・。

「ちょっ、ちょっとラビ！」

私は赤面して椅子から飛び降り、床に落ちたシーツをガバっと掴むと下半身に被せた。

「ねえ、さっきから呼んでるでしょ？」

ラビは臆することなくバタバタしながら喋り続ける。

この人・・・まさか羞恥心もない・・・？

私は彼の顔を愕然として見た。
精神年齢７歳だったら、なくても当然か。
私は一人で赤くなって汗をかいていた。
科学者としてありえないリアクションだ。
実験動物に生殖器があるのは当然だ。

なのに・・・。

実験体のこの人の外見は限りなく人間であり、そして普通の男性だった。

目的　2

ラビとの面会が始まってから1月がたった。
今ではお互い打ち解けて、おしゃべりも盛り上がるようになっていた。
彼が舌っ足らずな口調で子供のように一生懸命話すのを、私は学校の先生のように頷きながら聞く。
彼は知識はないが知能は低い訳ではないらしい。
私が話す世界のこと、科学のこと、何にでも興味を持ち質問をする。
そして恐ろしい勢いで吸収していく。
部屋に行く約束はまだ本部に許可を取っていなかったが、毎日のお喋りだけでラビは満足しているみたいだった。
だが、相変わらず面会の時は、彼はベッドに磔にされていた。

「ラビも起きて話ができればいいのにね。」

私が漏らした一言がいけなかった。
ラビの赤い目がいたずらっぽく光る。

「サヤカ先生が協力してくれるなら魔法を見せてあげるけど？」

「魔法？」

私は笑って聞き返した。
ラビは首を持ち上げ、四方に設置してあるカメラを顎で指した。

「あのカメラに残像を映すんだ。」

「残像？」

「そう。で、ベッドの裏側に手錠を外すボタンがあるんだよ。それを押して。」

「ラビ、それはできないわよ。規則があるんだから。」

「大丈夫、カメラはずっと同じ映像を写してるから。」

ラビはウィンクして見せた。
そしてカメラをじっと見据える。
彼が集中しているのを、私はただ唖然と見つめていた。
やがて持ち上げていた首をがくんと落とした。

「もう、大丈夫だよ。これで、しばらく見つからない。」

私は半信半疑でカメラを見つめる。

「残像がリピートされてるってこと？」

私は恐る恐る聞いた。

「そうそう。だから長い時間だとバレちゃう。早くボタン押して、サヤカ。」

ラビは足をバタバタさせた。
私は何がなんだかよく分からず、言われるままにベッドの下を覗き込んでボタンを押した。
その途端、彼の腕を固定していた手錠が二つに開いた。

「やったあ！」

上半身が自由になったラビはベッドの上でむくっと起き上がった。
長い銀髪がさらさらと肩に掛かる。
ラビはベッドから降りて私の前に立った。
初めて二本の足で立つラビを私は呆然と眺めていた。
小柄な私より頭一つ分は大きい。
いつも見下ろしていた白い顔に見下ろされているのが不思議な感覚だ。

「サヤカ先生、ちっちゃい！」

ラビは無邪気にあははは・・と笑った。

「じゃあ、お礼に魔法見せてあげるね。」

そう言って、ラビは私が今まで座っていた椅子に手を当てる。
彼の赤い目が光った。
その途端、パン！という音とともに木製の椅子がバラバラに飛び散った。
木材の断片が黒く焼け焦げ、煙が上がっている。
まるで、椅子に雷が落ちたようなそんな砕け方だった。
私は驚いて口も利けないままその場にへたり込む。
ラビは自慢げな顔で言った。

「サヤカ先生、ぼくは壊すのが得意なんだ。」

屈託なく笑う子供のような生物兵器。
それは彼の能力の僅か一部分に過ぎなかった。

目的　3

翌日、私はラビの面会に行く前に教授の元に向かった。
昨日の出来事のせいで、私の頭は混乱していた。

昨日ラビが椅子を破壊した時、私は情けないことにそのまま逃げ出してしまった。
生物兵器だと言われてはいたが、こんな話は聞いていない。
確かに彼が本気を出せば施設全体を破壊することも可能だろう。
私なんか虫を殺すより簡単に違いない。
２０才の男性の体に7歳の精神を持つ、クローン超能力者。
私は情報として理解はしていたが、それがどういうことなのか把握していなかった。

・・・私には荷が重すぎる。

私は教授の部屋の前に立つと、インターホンのブザーを押した。

「失礼します。オキノです。」
「ミス・オキノ。来ると思っていた。入りなさい。」

真っ白なドアが両サイドに開くと、白ひげに覆われたブライアン教授が現れ、私を迎え入れた。

「失礼します。あの・・・私・・・。」

ビクビクしている私の顔を穏やかな笑顔で、教授は見つめている。

彼の顔を見て、昨日の出来事が既に本部にバレているのを確信した。

まず、規則違反のことを謝るべきだろう。

あのまま飛び出したから、ラビがカメラにしたトリックもバレているに違いない。

敢えて辞退しなくても、解任されるかも・・・。

俯く私を見てブライアン教授は笑って言った。

「ＲＡＢＢＩＴが怖くなったかね？ミスオキノ。」

私は下を向いたまま頷く。

「あんな事、初めて見て・・・私には荷が重いと思います。こんな任務、どうして私が選ばれたんですか？」

「彼を見てわかったと思うが、彼には母親が必要だからだよ。君は若い女性で、責任感と思いやりがある。彼にはそういう人が必要だからだ。」

ブライアン教授は私に椅子を勧め、自分もソファに腰を下ろした。

「今回のヘルスチェックの仕事は、彼との相性を見るための訓練期間だ。むしろ君の訓練だったんだよ。」

「私の訓練？」

私は訳が分からなくなった。

「彼は兵器だ。いずれ戦地に赴いてもらうだろう。その際に、彼に

命令を遂行させるリーダー兼、トレーナーが必要になる。君はそのリーダーに任命される予定になっていた。」

「私が？戦地に一緒に行くってことですか？」

ブライアン教授は笑みを絶やさず話し続けた。

「君は行く必要はない。だが、彼が行くまでの準備をしてもらう。彼は今のところ精神年齢が低い。それは、実際には3年しか生きていないからだ。前の戦争で一度、脳に損傷を受けてから、前の人格は死んだ。それからまた生き直しているんだ。今、彼に必要なのは信頼できる母親のような存在、そして我々に必要なのは彼を自在に操ることができるリーダーだ。」

「その操ることができるリーダーに私を・・・？」

「今のところ適任だと判断されている。ＲＡＢＢＩＴは警戒心が強いから、誰にでも能力を見せる訳ではない。１ヶ月で信頼関係を作ったのは快挙だよ、ミス　オキノ。」

その言葉に、私はハッとした。
ラビは私を信頼して見せてくれたんだ。
逃げ出したりして彼もショックだっただろう。

「君達の面会は監視カメラを設置させてもらっているが、もう危害を加える心配もなさそうだから、君に一任してもいい。彼をベッド

に拘束するのも止めよう。君が続ける気があるならね。」

「・・・でも、私は彼の信頼を裏切ってしまいました。」

私は俯いて言った。

そうだ、もう続ける資格なんかない。

彼を傷つけてしまった。

「ＲＡＢＢＩＴは君を待ってるよ。行ってやってくれたまえ。」

ブライアン教授はウィンクした。

「え、じゃあ・・・。」

「続けてもらいたい。昨日のことは気にしなくてもいい。規則違反も水に流そう。」

真っ先に逃げ出した私を、ラビが許してくれた？

私は立ち上がると、挨拶もせず部屋を飛び出した。

いつもの無菌室の前で、私はパスワードを打ち込む。
いつものようにドアが開いた。

が、いつもと違うのは、今日の彼は前開きの白いシャツと白いズボ

ンというパジャマのようないでたちでベッドに座り込んでいる。
教授の言った通り、もうベッドに磔にされる必要はなくなったようだ。

ドアが開いたのに気付き、彼の白い顔が私を見た。

「ラビ、ごめんなさい。私・・・。」

言い終わらないうちにラビはベッドから飛び降り、私の元に駆け寄ると、その勢いのまま私を抱きしめた。

「もう、来ないかと思った。どこにも行かないで。一人にしないでよ、サヤカ。」

私の頭に温かい涙がポタポタ落ちた。
ギュっと彼の胸に押し付けられた私の耳に、彼の鼓動が聞こえる。
初めて触れた温かい体。
なのに、子供のように泣くこの人はいずれ戦場に行く兵器なんだ。

私は彼を抱き返した。
銀色の長い髪をなでてやる。

「大丈夫。私はあなたといるから・・・。」

私の言葉に彼はやっと力を緩めて、安堵したように微笑んだ。
赤い瞳が涙で潤んで、ルビーのように光っている。

この人を守らなくては・・・。

この時、私はそう決心したのだ。
そしてあの計画を立てたのもこの時だった。

別人　1

それから私達は急速に打ち解けた。

任務であるとか、このプロジェクトの目的であるとか、そんなことより目の前にいるこの純粋な人を何とかしたいと、私は考えた。

戦争の時の外傷で彼の本当の人格が死んだと教授は言ったが、そんなことが有り得るのか私には疑問だった。

有り得るとすれば記憶喪失。

ショックで何年か分の記憶が飛ぶのは、過去にも例がある。

もしくは辛い記憶を忘れる為に他人格が現れたり、幼児に後退する精神の病。

だとしたら、治る余地は充分にある。

心から信頼できる人間が一緒にいて、彼の心を癒すことで回復していく筈だ。

私は、ヘルスチェックだけでなくメンタルの面も診ていくことにした。

「サヤカ、もうすぐぼくの部屋だよ。」

突然、名前を呼ばれて、私はハッと我に帰る。

私達は、ムービングロードに乗って彼の部屋に行く途中だった。

立ってるだけで目的地まで勝手に歩道が動いて連れて行ってくれる

ので、これに乗るといつもぼんやりとしてしまう。
今日は研究所の許可も取って、私は公式に彼の部屋を訪問することになっていたのだ。

「ご、ごめん。また色々考えてた。」

私は慌てて謝る。

最初に思ったより大柄なラビが、私の顔を覗き込んだ。
サラサラの銀髪が私の顔にかかる。
その髪をかき上げながら、彼は私を睨んでふてくされた。

「サヤカ先生はいつも何か考えてるんだ。ぼくの部屋のことなんてどうでもいいんでしょ。」

「そ、そんなことないって。部屋で絵本読んであげるから、ね。」

彼はそれを聞いて心底嬉しそうに笑った。

「たくさんあるよ。ねえ、タジュウジンカクって何？」

私はぎょっとした。

「な、何でそんな言葉・・・」

ラビは首をすくめた。

「時々、サヤカの考えてることは聴こえる。でもサヤカはいつも難しいこと考えてて、聴こえてもよく分からない。」

私はギョっとして、無駄であるにも関らず、思わず手で口を塞いだ。
話に聞いたことしかなかった本物のエスパーだ。
私は驚いたが、もう動じない。
何が起きても不思議でない人なのだと、その時はもう理解していた。

やがて私達は病院のような真っ白なフロアに辿り着いた。
病室のような部屋のドアが等間隔に続いている。
その中の一つのドアの前で彼は立ち止まって、首から細いチェーンでぶら下げていたカードをスキャンした。
ドアが開いて、私達は外壁と同じ様に真っ白な部屋の中に入った。

そこにあるのは、真っ白なベッド、真っ白なテーブルと椅子、そして小さな本棚。
その本棚には彼のコレクションの絵本が並んでいた。
ラビは一冊の本を取って私に見せた。
それは古典的に有名な絵本、ピーターラビットだった。
ウサギの絵がかわいらしくて、私は思わず微笑んだ。

「サヤカ、その本はサヤカの前の先生がくれたんだ。次の先生に読んでもらえって。」

「私の前任者?」

そういえば、ラビと呼んでいたのも私の前にいた人だと、彼は言っていた。
その人はどうしているのだろう。
前任がいれば引継ぎがあってしかるべきなのに。

腑に落ちないものを感じながら、私はベッドに腰掛けて本を開いた。
ラビとは対照的な、茶色で黒い瞳の直立するウサギが愛らしく描かれている。
ラビは、いそいそと私の横に来て座り込むと、絵本を覗き込んだ。
「・・・ピーターは好物のニンジンを食べようとして・・・。」

途中まで読んで私は気が付いた。
本の最後のページに誰かのメモ書きがある。
それは、今は存在しない私の祖国の文字、古代日本語だった。
ヒラガナくらいは日系人としての教養程度に読める。
私の鼓動が速くなった。

メモにはヒラガナでこう書かれていた。

すべてをしりたければでんわしろ　ななよくよん　はちごにによん
　じぇいど

「ジェイドは前の先生の名前。今はここにはいないみたい。」
また私の考えが聴こえてしまったのが、突然、ラビが口を挟んだ。
その顔に好奇心と、不安が表れていて、ラビがこの人の事を気にかけているのが分かった。

「・・・いい先生だったのね？」

「ぼく好きだった。ラビって呼んだのは、ジェイド先生とサヤカ先生だけだし。」

少し寂しそうなラビの肩を、私は叩いた。

「大丈夫、生きてればいつかまた会えるよ。」

「そうかな？また、会いたいな。」

ラビは気弱な微笑みを見せた。

引継ぎも紹介もされなかった、前任者ジェイド。

この人に会わなければならないだろう。

私はそのメモ書きを、ケータイで写真に収めた。

別人　２

本棚に置いてあった、数冊の絵本を読み終えてから、私は立ち上がろうとした。
そろそろタイムリミットだ。
夜の講義にも出なくてはならない。

「ねえ、今日はここに泊まってくれる？」

突然のラビの言葉に、そんな事を考えていた私はぎょっとした。

「泊まるのは無理よ。許可取ってないし。」

「ぼくが頼んでおく。ねえ、泊まっていって。」

顔が近づき、赤い瞳が私を見つめている。
私の胸の鼓動が速くなった。
こんなにきれいな人に真っ直ぐ見つめられたら、誰でも変な気になるに違いない。
彼は実験体で、精神は子供で、しかも、私は彼の担当研究員なのに。

「ちょっ、ちょっと待って・・・。」

私は動揺しながら、腕で近づいてくる彼の体を押し戻した。
でも、彼はその倍の力で腕を押し戻し、私に近づいてくる。
突然、私の体が金縛りにあったように動かなくなった。

こ、これはもしかして・・・。

「ラビ、何かしてるでしょ？」

顔の筋肉は何とか動いたので、私はそれだけやっと言った。
ラビはそれに答える様に肩をすくめてニヤっと笑った。
否定はしないようだ。

「こ、こら！反則でしょ、こういうの。止めなさい！」

ラビは構わず、硬直している私を抱きしめた。
動けなくなった私を、いとも簡単にベッドに押し倒す。
抱きしめられたまま、私はそれが不快なものでないことに自分でも驚いていた。
もしかすると私も心のどこかでこうなることを望んでいたかもしれない。
抗えない見えない力で私は抵抗もすることも出来ず、彼に抱かれるままでいた。

「サヤカ先生といると、何だか変な気持ちになってくるんだ。知らない人がぼくの中から呼んでいるみたいな・・・変な感じ。でも、嫌な感じじゃないんだ。」

ラビはベッドに押し倒された私を見下ろして言った。

銀色の髪がサラサラ落ちてくる。
赤い瞳は私を真っ直ぐに射抜き、目を逸らすこともできない。
吸血鬼というのに襲われたらきっとこんな感じなんだろう。
やがて彼の顔が私の胸元にゆっくり近づいてきた。

襟のボタンが突然、弾け飛んだ。
顕わになった私の胸の谷間に、彼の唇が触れる。

嫌ではなかった。
でも、こんなのフェアじゃない。

有り得ない未知の力で押さえ込まれる恐怖もあったのかもしれない。

気が付けば私の目から涙が溢れていた。
何の涙なのかは、自分でも分からなかった。

私の嗚咽に気付いたラビははっと我に返り、体を離した。
途端、私の体の緊張が一気に緩み、神経が通い出す。
体が自由になっても、私はベッドに仰向けになったまま泣き続けた。

「ご、ごめん。サヤカ先生。な、泣かないで・・・。」

ラビはおろおろして、私に触ろうか触るまいか迷っている手だけが宙を彷徨っている。

私はノロノロとベッドから起き上がった。
乱れた黒髪が顔にかかる。
私はそれをかきあげ、ラビを見た。

恨めしそうな顔で私に見据えられた彼は、ビクッとして背筋を伸ばす。

「・・・約束して。人の嫌がることに力を使わないって。特に女の子には絶対こんな風に使っちゃダメ。」

私は、しゃくり上げながらそれだけ何とか言った。

「・・・分かった。ごめんなさい。もう、先生には使わないよ。」

しょげ返ったラビは、肩を落としてそう言った。
その姿はいたずらして叱られた子供のようだ。
彼の精神は確かに子供なのに、今しようとしたことはなんなのだろう・・・。

被害者はこっちなのに、すっかり元気をなくしたラビは私以上に落ち込んで黙ってしまった。

「私、そろそろ帰らなくちゃ。明日もヘルスチェックはやるからね。」

何を話しかけても今度は喋らなくなったラビに、私は立ち上がって言った。
スネた子供がだんまりを続けるのと全く同じだ。
こういう時は見放すに限る。

「やだ！待ってよ。」

予想通り、彼は飛び上がって、私に駆け寄った。
これも、想定内の子供の反応だ。
だが、一つ想定外だったことが起きた。
駆け寄ってきた彼がいきなり私を抱きしめ、キスをした。
見えない力ではない、彼の力で抱きすくめられながら、私は侵入してきた彼の舌を受け入れた。

息が止まりそうな勢いで彼は私の唇を貪る。
濃厚な仕草はとても子供のものとは思えない。

＜俺は子供じゃない！＞

突然、頭の中に声が直接響いてきた。
ヘッドフォンで音楽を聴くような、自分の頭の内部から聴こえてくるような、そんな声だ。
間違いなく、彼が私の頭に直接語りかけている。

これがテレパシー？

＜あなたが好きだ、サヤカ。俺を解放してくれ！＞

実際には音など聞こえないのに、その声は大音響で頭の中に響いている。
彼の激しいキスを受けながらも、ガンガン響いてくるその声で私は眩暈がしてその場に座り込んだ。
その途端に声がピタリと止んだ。
そこには呆然と立ち尽くすラビがいた。

「今の・・・誰？」

ラビは、座り込んだままの私にぼんやり問いかけた。

前任者　1

大学の敷地内にある学生寮に私が戻った時、外は真っ暗になっていた。
月明かりがカーテンの隙間から差し込んでいる。
私は月明かりの差し込むベッドに倒れ込んだ。
まだ私の動悸は止まらなかった。
あの頭の中に直接語りかけてきた声、あれこそラビの本当の人格だと私は確信した。

＜俺を解放してくれ！＞

声がまだ頭の中で響いている。
初めてのラビのキスは、あの声と一緒に何度も脳裏に浮かんだ。

私は何を考えているんだろう・・・。
こんなんじゃ、担当として失格だ。

この異常事態に、私は場違いな感情を持て余していた。
実験体に私情どころか愛情を持ってしまったら、冷静な判断もできない。

私は溜息をついて起き上がった。
はだけた胸元を見ると、あったはずのボタンが跡形もなく無くなっている。
彼ができることは物を壊すことだけではない。

今まで、遭遇しただけでも、テレパシー、テレポート、念写・・・。生物兵器としてはオールマイティーな超能力を兼ね備えているに違いない。
金縛りにあった時の彼の瞳を思い出し、私は少し背筋が寒くなった。
ふと、ケータイに記録した前任者ジェイドの事を思い出した。

「そうだ、電話しなくちゃ。」

私はガバッと立ち上がり、鞄の中からケータイを取り出す。
ヒラガナでわざわざ書いて置いていったということは、間違いなく私を指名して呼んでいるのだ。
古代ヒラガナで書かれたこのメッセージが一般の人が読める筈がないのだから。
後任の私が、日系人だと知ってての行為に違いない。
しかも、私と接触したことを内部の人間に知られたくない為、絵本の中にメッセージを書くという方法を取ったのだろう。
私は逸る心を抑えつつ、ケータイの番号を押した。

ルルルル・・・・
ルルルル・・・・

何度かコール音がして、私が諦めた時、ケータイから低い男性の声がした。

「アロー？」

私の動悸が激しくなる。

「ミスター・ジェイド？」

私はかすれた声で聞いた。

「・・・そうですが？あなたは？」

静かな低い声だ。

「わ、私はサヤカ　オキノ。あなたの後任者です。」

「・・・・・。」

電話の向こうで彼は沈黙した。

「あの・・・ジェイド？あなたのメッセージを読んで電話しました。今どこにいるの？」

「・・・・ミス・オキノ。明日会えるか？」

声が尋ねる。

「は、はい。どこに行けばいい？」

「ダウンタウン・リオ。そこに『フェリシダージ』ってカフェがあるから、明日のこの時間に一人で来てくれ。」

それだけ言うとジェイドは電話を一方的に切った。
ツーツー・・・という電話の音を聞きながら私は呆然としていた。
この人が誰なのか、信頼できるのか、分からない。

けれど、私はこの人に会わなければならない。
その時、何故か私には確信があった。

前任者　2

翌日、私はいつも通りラビのヘルスチェックにやって来た。
ＩＤカードをスキャンするとドアが開き、相変わらずベッドの他は何もない白い部屋がある。
そのベッドにラビはパジャマのような白装束で腰掛けていた。

私は昨日のことを思い出し、勝手に赤面した。
いつもなら駆け寄ってくるラビも、今日は私の姿を見てもノーモーションだ。
彼も気にしてるんだろうか。
だが、公私混同してはいけない。

「元気？体調は？」

私は笑顔を見せながらベッドの傍の椅子に腰掛けた。
いつも通り彼の腕にゴムを巻きつけ、血圧を測り始める。
最新の医療器具を使えば、腕に触れるだけで体脂肪から血圧から何でも瞬時に計測されるのだが、私は古典的なこの方法に拘った。
計器で計った方が数値は正確に出るだろうけど、直に肌に触れた時ほど、患者の体調を感じる事はないからだ。

彼はぼんやり私を見つめながらされるがままになっていた。

「昨日のこと、もう怒ってないからラビも笑って。ね？」

黙り続けるラビなんて初めてだった。
私は何だか居心地が悪くて、話しかけたが彼は無表情のままだ。

「・・・どうしたの？気分悪い？」

「・・・先生・・・。」

ラビは重い口を開いた。

「最近、なんか変なんだ。別の人の声がするんだ。昨日みたいにはっきり聴こえたのは初めてだったけど、最近、声が大きくなってきてる。」

私は彼の白い顔を見た。
小さな少年のように怯えている。
私が彼の力に驚いたように、彼も自分の中の未知の部分に恐れを抱いている。

「・・・それで、その声が聴こえるとぼくは嫌な事を思い出しそうなんだ。何か分かんないけど、思い出しちゃいけないこと。ぼく、なんか怖いんだ。」

私は彼の白い手を握った。

「大丈夫、私が治してあげるよ。私は先生だからね。」

私は確信もなく力強く言った。
ラビはか弱く笑う。
大人しく検診される彼の銀色の頭を眺めながら、私は昨日の出来事を思い返していた。

ラビの記憶にない別人格、全てを知っているらしい私の前任者。
ここに来てからの記憶がないラビ。
私がここに来る以前、いや、ラビがここに来る以前に何かがあった。
それを知るためにも、私は今日ジェイドに逢わなければならない。

そこで、私が懸念している事が一つあった。
昨日の声の主が本当の人格だとしたら、今の少年のラビは・・・？

ラビはボンヤリ考えていた私を、突然、クルリと振り返って見上げた。

「サヤカ、ジェイドに会うの？」

頭の中を突然読まれて、私はギクっとして固まった。
考える事も落ち着いてできやしない。
嘘をついてもバレてしまうので、私は仕方なく白状することにした。
口を開きかけたその時、頭の中にラビの声が大音響で響き渡った。

≪喋らないで！ジェイドの話はここではしてはいけないって言われてる。ジェイドに会うなら秘密にしなきゃダメだよ。誰にも言わないで。≫

慣れないテレパシーに私は頭を抑えてしゃがみ込んだ。
ヘッドホンから最大ボリュームで彼の声をマイクで聞いた、そんな感じだ。

「わ、分かった。忠告ありがとう。だから、普通に喋って！」

私のリアクションに彼は声を出さずに笑った。

≪早く慣れてね、サヤカ。僕は本当は喋るのは面倒くさいんだ。この方が楽。≫

「あ、あなたは、そうでしょうけど、私は普通の人ですからね！もう、声で喋ってよ。」

「はあい。」

私の必死のお願いに、ラビは舌をペロっと出して肩を竦める。

昨日の事でへこんでいた彼が少し元気になって、私はホッとした。

外1

ラビと別れた後、私は久し振りに外に出た。

私の所属する国立大学はラビが収容（保護？）されているクローン研究所と隣接しており、それらは要塞のような城壁で囲まれた広大な敷地の中にあった。

自分で言うのも何だけど、数少ない国立大学の中の、クローン研究という国家機密を専攻するには相当なレベルが求められる。

地方都市の一般家庭で生まれ育った私が入学する事ができたのは、奇跡に近かった。

全寮制なので、卒業するまで私はこの敷地の中で暮らすことになる。卒業まで後一年。

ラビの研究、訓練が終了した後、私はどうなるのか、まだ教授からは具体的な話は出ていなかった。

生徒の大半は白人系民族で、黒髪に黒い目のステレオタイプの東洋人の私は、この敷地の中では目立っていた。

かつてこの地球にはあらゆる民族が国という単位で区切られ、それぞれのやり方で統治していたらしい。

23世紀の今、国という区切りはなくなり、地球という惑星単位での統治となった。

月や火星の開発が進んで、地球の人口が激減したことが理由だと、小学校の歴史の時間に習った。

22世紀の事だし、歴史の授業でも触れられることは少ない。

私のルーツである日本がこの地球上のどこにあったのかは、今だに謎になっている。

地殻変動のためにどこかの大陸に合併されたとか、海底に沈んだとか噂はある。
２１世紀の後半までは確かに存在していた事は、文献に残っていた。

私はラビの白い顔を思い出した。
クローンというからにはオリジナルの人間がいる筈だ。
彼の色素のない肌や目に惑わされるが、顔立ちや細身の体型は東洋人の血を引いているように思われた。

今夜会うジェイドなる人物は、ラビの出生についても何か知っているのだろうか。
彼の事を研究所内で話すのはタブーだと、ラビは言っていた。
期待と不安で鼓動が速くなる。

大学の正門の認証システムにＩＤカードを差し込むと、３メートルほどもある巨大な扉が左右にゆっくりと開いた。
私が通り過ぎるのを待って、ドアは再び厳かに閉められる。
目の前には久々の「外」が広がっていて、私は思わず深呼吸した。

郊外にあるこの敷地の周りは、真っ白なムービンググロードが張り巡らされている。
完全なまでに整備されたその道には、人も車も走っていない。
大学関係者でない限り、この地区までやって来る人は滅多にいないからだ。
遠くに靄がかかった高層ビルが立ち並んでいるのが見えて、私は大気汚染された故郷を思い出した。
今から向うダウンタウンは、あの高層ビル群の裏側に広がっている筈だった。

私は空に向かって、私の足であるフライングソーサーのキーのボタンを押した。
今でも地上を走る自動車は存在しているが、一人、二人だけなら、個人用フライングソーサーを利用するのが主流だった。
文字通り空飛ぶ円盤型の小型飛行機なのだが、自動車と同じ感覚で運転できる為、一家に一台は必需になっている。
私も自分のフライングソーサーを所有していて、キーのボタンを押すだけで大学内の車庫から勝手に迎えにきてくれるのだ。

1分もしない内に、私の目の前にパステルピンクの円盤型飛行物体が着陸した。
円盤の上部が上に向かって静かに開く。
その中の狭いコックピットに私は乗り込んだ。

外 2

平均３００階はある高層ビル群を、私はコックピットの中から見下ろした。
運転には慣れているとは言え、街中に入ると、ソーサー利用者が多くて、時にトラブルになることもある。
前方に注意しつつも、私は眼下に広がる人工建造物の圧倒的迫力に見入ってしまった。
未来都市の名前に相応しい光景だと思った。

白い巨大な建造物の林立しているメインエリアを飛び越えると、一気に寂れた雰囲気のエリアが現れた。
さっきまでと打って変わって、平均１０階くらいしかない崩壊寸前のビルが立ち並ぶエリア。
ダウンタウンだ。
彼が指定してきたリオという地区は、この寂れたダウンタウンの一角にある筈だった。

時刻は5時を過ぎていた。
太陽が傾き始めると、電気が充分に通っていないこの地区は一気に薄暗くなる。
こんな時間に一人でここに来たのは初めてだ。
ここではテロやら、チンピラの抗争やら、銃声が絶えることはない。
今も昔も夜のダウンタウンには行ってはいけないと暗黙の了解になっている。
ここまで連れて来てくれたフライングソーサーを半分崩壊しているビルの屋上に停止させた後、私はジェイドに指定された「フェリシダージ」に向かった。

ひび割れたアスファルトの道路をゴミを踏まないように気をつけながら、爪先立ちで歩いていく。
闇に覆われていくダウンタウンの空に、銃声が遠く響くのが聞こえた。

◇◇◇◇

落書きだらけのコンクリートの建物が半壊したまま、佇んでいる。
フェリシダージは、その半壊している建物の地下にあった。
何しろ、原型を留めているのは一階部分だけで、二階より上は外壁もない状態で、内部が丸見えだ。
私は「Ｃａｆｅ　Ｆｅｌｉｃｉｄａｄｅ」と書かれた看板が引っかかっている、一階部分のドアを開けた。
ドアの向こうはいきなり地下へと続く階段になっている。
階段の下にまた扉があって，その奥から僅かな光と音楽が洩れていた。
私は恐る恐る階段を降り、その扉を開いた。

開けた途端に、大音響で音楽が流れてきた。
私はその音に思わず耳を塞いで立ち竦む。
薄暗い店内の中央では、抱き合うように激しく踊り狂っている男女で一杯だった。
カウンターで酒を飲んだくれている男性、明らかに夜の客を呼び込んでいる厚化粧の女性。
店の隅のテーブルではあられもない格好の若い女の子が男に抱かれている。
タバコの匂いに混じって、甘ったるい匂いが店内に充満している。
コカインだろう。

古典映画で見る、典型的「場末の酒場」だった。
いまだにこんな場所があるのかと私はむしろ新鮮な気持ちでしばらく店内を見回した。
入り口前で呆然と立ちすくす私を見て、背の高い女性が近づいてきた。
ブロンドの長い髪が波打ち、豊かなバストが辛うじて覆っている黒いブラからの上で揺れている。
黒いパンティから真っ白な足がすらりと伸び、ガードルで引っ張り上げている網タイツが艶かしい。

「いらっしゃい、何か飲み物でも？」

甘ったるい声で女性は妖艶に微笑んで言った。
真っ赤な唇から白い歯が覗く。
私は同性なのに何故かドキドキして、赤くなった。

「あ、あの、こちらにジェイドさんていらっしゃいますか？」

女性は、ああ・・・と言ってにっこり笑い、先程の男女が絡んでいる隅のテーブルを指差した。
若い女の子は今や殆ど全裸に近い状態にされて男に抱かれている。

「ま、まさかあの男の人！？」

私は衝撃で大声を出した。

「うっそ。あの反対側の隅のテーブルで一人で座ってる男よ。」

女性は舌をペロリと出してケタケタ笑った。

からかわれたのが分かった私は胸を撫で下ろし、女性にペコリと頭を下げると男のテーブルに向かった。

その男はビールを前に一人でタバコをふかしていた。
歳は３０後半くらいだろうか。
長めの黒い髪に、切れ長の黒い瞳。
明らかに私とルーツの同じ東洋人の風貌をしている。
整ったシャープな顔立ちは美形だと言ってもいいだろう。
でも、私はその顔立ちに見覚えがあるような気がした。

「ジェイドさんですか？」

私がテーブルの前に立って声を掛けると、彼はやっと顔を上げた。

「ミス　オキノ？」
「そうです。私に話があるんでしょう？」

彼の切れ長の目が鋭くなった。

日本人　1

「よく分かったな。日系人がヒラガナ読めるとは、実はあまり期待してなかったんだが。」

ジェイドは足の長い丸テーブルに頬杖をついたまま、顎をしゃくって、私に目の前の椅子を勧めた。

圧倒される鋭い眼光に、私は蛇に睨まれた蛙のようにギクシャクしながら椅子に腰掛ける。

正面から向かい合ったジェイドの顔を、私はしげしげと観察した。

細面の白い顔は頬がこけて、端正な顔立ちの険しさを際立たせている。

長めの黒髪は硬質な直毛で、触れるのを拒むようなハリネズミみたいだ。

そして、東洋人の特徴の切れ長の目に漆黒の瞳。

見ていると闇の中に引きずり込まれそうな嫌な感じだ。

私も迫力負けしないように、必死で自分の黒い瞳を見開いた。

「初めまして。ミスター・ジェイド。ご存知の通り、私はあなたの後任でラビの研究をしているサヤカ・オキノ。まだ医学部の学生でクローンの研究は専攻科目なの。ラビの事とか、このプロジェクトについて色々知りたくて、あなたに会いに来ました。失礼だけど、私、あなたのことは何も聞かされていないし、前任がいたっていう事実さえ教えられてなかった。ヒラガナが書けるってことはあなたも日系人なのね？どうして研究所を辞めたの？」

私の言葉をジェイドはタバコを咥えながら黙って聞いていた。

ただ、最後の『辞めた』という言葉に、彼は筆で描いたような眉を

ピクリと上げた。
「・・・そうか、あんたまだ学生か。どうりでバカで素直だと思った。」
タバコの煙を吐き出しながら、ジェイドは横目で私をチラリと見てニヤっと笑った。
真摯に話しているのがバカにされて、私は思わず顔を引き攣らせる。
「・・・どういう意味ですか？私、バカにされるような事言いました？」
「いや、言い方が悪かった。怒るなよ。昔の俺みたいだって思っただけだ。」
ジェイドは髪をかきあげ、目を細めて笑った。
笑うとさっきの闇の印象が嘘のように消えて、見かけより若いであろう彼の素顔が垣間見れた気がした。
同時に、さっきの違和感を再び感じる。
この笑顔に確かに見覚えがある。

「長い話になる。なんか飲むか？あんまり時間はないんだけど。」
そう言いながら、ジェイドは指を口に咥えて高らかに口笛を鳴らした。
上品とは言い難いその仕草が、彼のやさぐれた雰囲気とこの場末の酒場によく似合っている。
さっきのグラマラスな女性が口笛に気が付き、グラスが並んでいるトレイを片手に載せて優雅に歩み寄ってきた。
「言っとくけど、ノンアルコールはないわよ。」

甘い声で彼女はそう言うと、私の前にトレイを突き出しウィンクした。
帰りの事を考えるとアルコールを飲む訳にはいかなかったけど、衛生的とは言い難いこの店の商品を飲む気もしなかったので、私は無難にビールを取った。

一瞬、私の眉間に皺が寄ったのを、彼女は見透かしたようにフンと鼻で笑うと、クルリと背を向けてまたホールに戻って行った。

彼女の後姿をしばらく横目で見送ってから、ジェイドは自分の前にあったビールのジョッキを掲げてみせる。

「俺だけ名乗らないのはフェアじゃないな。初めまして、ミス・オキノ。俺はジェイド・ワタル・タカハシ。
ラビは俺を前任だと思ってるだろうけど、厳密に言えばそうじゃない。あんたは既に色々勘違いしてるみたいだな。」
「・・・勘違い？」
「そう、勘違いだ。そもそも、どうして俺が日系人だと思った？」
「・・・だって、ヒラガナが書けるのは僅かに生き残ってる日系人だけだって言われてるわ。私だって家で教えて貰わなかったら勉強する機会なんてなかったもの。」
へぇと、ジェイドは少し興味を持ったように言って、片眉だけ器用に上げてみせる。

「あんたは何系の日系？」
「南米大陸だって聞いたわ。一番、生存率が高かったって。」
「・・・生存率、ね。」
考え込むように少し黙り込むジェイドを、私は不思議な気持ちで見

ていた。
低い落ち着いた声は、私の心を落ち着かせる何かがあった。
この人は信頼できる。
漠然とだが、私はその時そう感じていた。

やがてジェイドは、少し体を乗り出すと更に低い声で私に囁いた。
「俺は『日系』じゃない。今だ生存する数少ない本物の日本人だ。もっと言うと日本はまだ存在している。地図には載ってないけどね。」

自嘲的に言った彼の言葉に、私はどう反応していいか分からず、ただ彼の顔を見つめていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7656n/

Innocent RABBIT

2011年10月26日02時08分発行